

症 例

食道平滑筋肉腫の1 治験例

東京女子医科大学第2病院外科

湖山 信篤	小川 健治	花岡 農夫	服部 俊弘
中田 一也	菊池 友允	芳賀 駿介	芳賀 陽子
梶原 哲郎	榊原 宣		

A CASE OF LEIOMYOSARCOMA OF THE ESOPHAGUS

**Nobuatsu KOYAMA, Kenji OGAWA, Takao HANAOKA, Toshihiro HATTORI,
Tomomitsu KIKUCHI, Syunsuke HAGA, Yoko HAGA,
Tetsuro KAJIWARA and Noburu SAKAKIBARA**

Department of Surgery, Tokyo Women's Medical College Daini-Byoin Hospital

索引用語：食道平滑筋肉腫

はじめに

食道平滑筋肉腫はきわめてまれな疾患であり、本邦においては1950年志田¹⁾の報告以来、わずか30例を数えるにすぎない。著者らは最近その1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：28歳，男性

主訴：嚥下困難

既往歴・家族歴：特記すべきことはない。

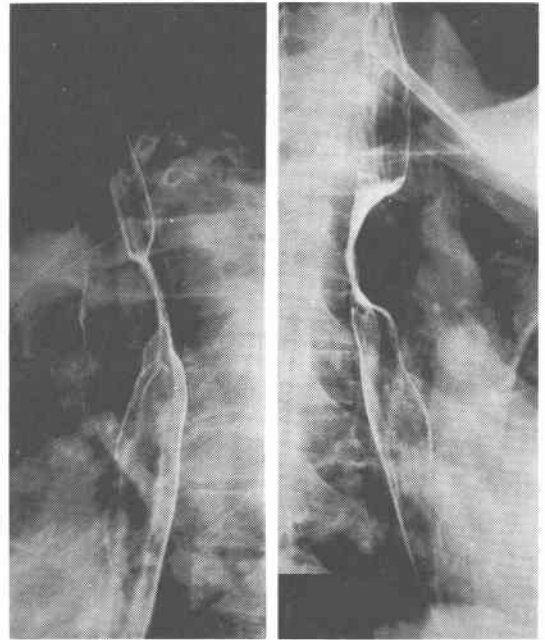
現病歴：約2年前より誘因と思われるものなく嚥下困難が出現。次第に著明となり、心窩部痛もあったため1980年3月近医受診，上部消化管透視で食道狭窄を指摘され，手術目的にて当科紹介され，同年4月入院した。

入院時所見：体格中等度，栄養状態良好，貧血，黄疸なく，その他理学的にも異常所見は認めない。また血液検査，生化学検査にとくに異常所見はないが，胸部X線写真で気管の右方偏位を認める。

X線検査所見：胸部上部食道Iuに約5cmにわたる腫瘤型の陰影欠損を認める。粘膜面に不整や潰瘍性病変はなく，バリウムの通過状態は良好である。また狭窄部における食道壁の伸展性は保たれ，その口側に拡張は認められない(図1)。

内視鏡検査所見：上門歯列より22cm，前壁を中心に約半周の隆起性病変を認める。その立ち上りはなだらかで，粘膜面の色調はいくぶん白色である。隆起の

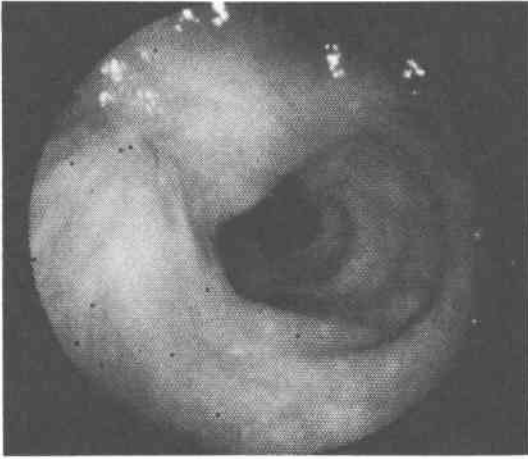
図1 食道二重造影像



中心には粘膜の軽いひきつれを認める(図2)。生検を行ったが，結果は軽度のLeukoplakieであった。

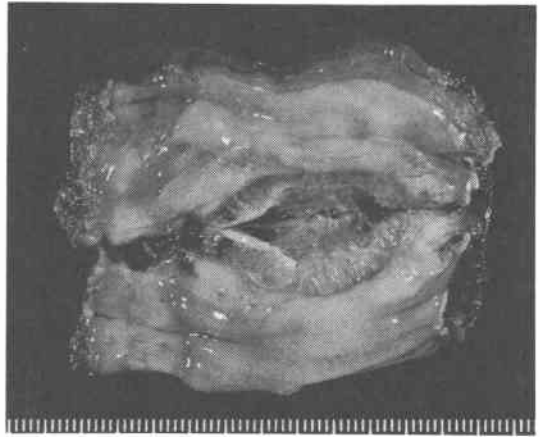
手術所見：食道粘膜下腫瘍の診断のもとに，1980年5月8日，右開胸開腹胸部食道全摘胸骨後頸部食道胃吻合術および幽門形成術を施行した。腫瘍は奇静脈を下縁とし，長径約6cm，気管分岐部直上に位置し，周

図2 食道内視鏡像



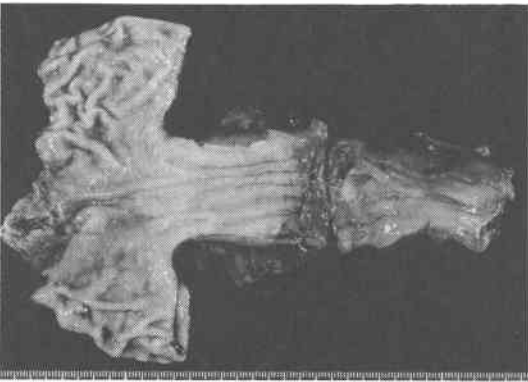
前壁を中心に約半周の隆起性病変をみる

図4 切除標本剖面像



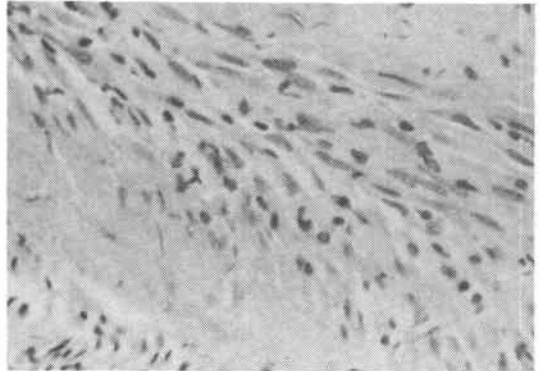
一様に灰白色、充実性である。境界は明瞭でない

図3 切除標本像



胃接合部より6.5cm口側に腫瘍をみる

図5 病理組織像 (HE染色)



異形性の強い長楕円形核を有する紡錘形細胞が束状に錯走している

珣組織との癒着は強く、気管膜状部との癒着も認められた。食道癌取扱い規約²⁾にしたがえば、 $A_3N(-)M_0$ pl_0 の所見であった。

切除標本：切除された食道は12.5cm、食道胃接合部より6.5cm口側にある腫瘍は弾性硬、大きさ1.5×3.2×6.0cmで食道内腔に突出している。粘膜面所見は腫瘍に一致して、軽度のひきつれをみるのみである(図3)。剖面は硬く、一様に灰白色、充実性である。腫瘍は主として粘膜下にあるが、浸潤性増殖を示し、固有筋層、外膜などに及んでいると思われ、その境界は明瞭でない(図4)。

病理組織所見：異形性の強い長楕円形核を有する紡錘形細胞が束状に錯走し、外膜への強い浸潤増殖傾向がみられる。核分裂像が存在すること、浸潤増殖傾向

をもつことから食道平滑筋肉腫と診断した(図5)。

術後経過：術後経過は良好で術後28日目に退院した。現在、外来で食道癌術後に準じてFT-207, PSKを投与、経過を観察している。

考 察

食道肉腫はまれな疾患であり、食道悪性腫瘍のうち、0.1~2.2%³⁾であるといわれる。

食道肉腫の組織型分類をみれば、欧米では線維肉腫50.8%、平滑筋肉腫14.5%となっている⁴⁾。これに対し本邦では平滑筋肉腫が最も多く29.1%、以下悪性黒色腫22.6%、癌肉腫14.5%、線維肉腫6.5%となっている³⁾。

このように本邦では平滑筋肉腫が多いとはいえ、われわれの集計しえた限りでは食道平滑筋肉腫は、1950

年志田¹⁾の報告以来、現在までに30例^{1)3)5)~35)}を数えるのみであり、また欧米でも42例の報告³⁶⁾をみるにすぎない。

食道平滑筋肉腫本邦報告例の性別および年齢は表1のごとくである。

男女比は20:8である。欧米においても20:13と男性に頻度が高く³⁷⁾、同じ傾向を示している。

年齢は50歳、60歳代に集中している。自験例は28歳という若年者症例であり、山内ら²³⁾の報告による25歳について若い食道平滑筋肉腫症例である。そこで、食道平滑筋肉腫本邦報告例を若年群(39歳以下)、中年群(40~59歳)および老年群(60歳以上)の3群に分類し、年齢別からみた予後、発生部位、大きさ、肉眼型、治療などにつき検討してみた。

年齢と予後

年齢と予後の関係は表2のごとくである。若年群の術後経過日数は短期間であるが、1年以内死亡例はない。中年群11例中、生存は6例、死亡は5例あり、そのうち5年以上生存は2例、1年以内死亡は4例となっている。老年群7例中、生存は4例、死亡は3例

あり、5年以上生存は1例、死亡例は全例が1年以内に死亡している。

1年以内死亡例は中、老年群に多くみられ、若年群の予後は良好である。亀岡ら³⁾は、1976年における本邦報告例の集計で、1年以内死亡は50歳以上の年齢層に多いとする一方、5年以上長期生存例は40歳、50歳、60歳代に各1例あり、生存例に年齢的因子の関与を認めないとしている。しかし1年以内死亡からみれば、若年群症例は術後観察期間が短かいとはいえ、自験例も含めて全例が1年以上生存しており、1年以内死亡例の圧倒的に多い中、老年群より予後はよいと考えられる。

年齢と発生部位

年齢と発生部位の関係は表3のごとくである。上部3例、中部10例、下部15例であるが、年齢別にみれば、若年群は上、下部にみられ、中、老年群には下部が多い傾向のように思われる。上部3例に死亡例はなく、中部10例のうち1年以内死亡3例、5年以上生存1例、下部15例のうち1年以内死亡4例、5年以上生存2例となっている。上部症例には若年群例が多いため、予後は良好と思われる。

年齢と大きさ

年齢と腫瘍最大径の関係は表4のごとくである。4.9cmまでの小さいもの5例、5.0~9.9cmの中等度のもの15例、10.0cm以上の大きいもの5例となっており、年齢別にみれば、若年群には小さいものが、中、老年群には中等度のものが多く、若年群は中、老年群に比較して発見がより早期であると思われる。また各群とも10.0cm以上の大きいものは少ないという傾向であ

表1 食道平滑筋肉腫の年齢および性別

年齢(歳)	男性	女性	計
20~29	1	1	2
30~39	2		2
40~49	2	2	4
50~59	8	1	9
60~69	7	3	10
70~79		1	1
計	20	8	28

(年齢、性別不明 3例)

表2 食道平滑筋肉腫の年齢と予後

観察期間	~39歳		40~59歳		60歳~	
	死亡	生存	死亡	生存	死亡	生存
1年以内			4	3	3	
1~2年		4	1	1		2
2~5年						1
5~7年				1		
7年以上				1		1
計		4	5	6	3	4

(年齢、予後不明 9例)

表3 食道平滑筋肉腫の年齢と発生部位

発生部位	~39歳	40~59歳	60歳~	計
上部	2		1	3
中部		6	4	10
下部	2	7	6	15

(年齢、発生部位不明 3例)

表4 食道平滑筋肉腫の年齢と腫瘍最大径

大きさ(cm)	~39歳	40~59歳	60歳~	計
~4.9	2	2	1	5
5.0~9.9	1	7	7	15
10.0~	1	2	2	5

(年齢、大きさ不明 6例)

る。予後をみれば、小さいものに死亡例はなく、中等度のもの15例のうち1年以内死亡は3例、5年以上生存は2例あり、さらに大きいもの5例のうち1年以内死亡は1例と少ないが、2年以上生存例はみられない。亀岡ら³⁾も指摘するごとく、腫瘍の大きさはある程度予後に関与するものと思われ、小さいものが多い若年群の予後は良好となっている。

年齢と肉眼型

食道平滑筋肉腫の肉眼型は従来より Thorek ら⁴⁾, Rainer ら³⁷⁾, Kaufmann³⁸⁾, Ewing³⁹⁾らにより分類されているが、われわれも本邦例をポリープ型と浸潤型に分類し検討した。

ポリープ型：浸潤型は19：7であり、欧米における18：11³⁷⁾とはほぼ同じく、ポリープ型が多くみられている。

年齢との関係は表5のごとくである。若年群、高年群は浸潤型に比較してポリープ型が圧倒的に多く、中年群では浸潤型の占める割合が高くなっている。また予後をみれば、ポリープ型19例のうち1年以内死亡は中、高年群に各1例、5年以上生存は中年群2例、高年群1例である。一方、浸潤型7例のうち1年以内死亡は中年群3例、高年群1例であり、5年以上生存例はみられない。本邦、欧米諸家の指摘するごとく³⁸⁾³⁷⁾、ポリープ型の予後は浸潤型に比較して良好である。

さらに年齢別にみれば、若年群は主としてポリープ型のため死亡例はなく、中年群は浸潤型の割合が高いため1年以内死亡例が多いものと思われる。また高年群にポリープ型が多いにもかかわらず1年以内死亡例がみられるのは、それがすべて手術直接死亡であることなどから手術に対する年齢的なリスクの関与も充分に考えられよう。

年齢と治療

食道平滑筋肉腫の治療は癌腫と同じく、手術が原則である。本邦例でも17例に食道切除術、5例に腫瘍摘出術が施行され、また胃瘻造設など姑息手術は1例、放射線療法ないし化学療法のみが2例になされている。

表5 食道平滑筋肉腫の年齢と肉眼型

	～39歳	40～59歳	60歳～	計
ポリープ型	3	8	8	19
浸潤型	1	5	1	7

(年齢、肉眼型不明 5例)

表6 食道平滑筋肉腫の年齢と治療

治療法	～39歳	40～59歳	60歳～	計
食道切除	3	5	9	17
腫瘍摘出	1	4		5
姑息手術		1		1
放射線化学療法		2		2

(年齢、治療法不明 6例)

年齢と治療の関係は表6のごとくである。若年群では切除されている一方、中年群は姑息的治療の症例もみられている。また高年群では年齢的にハイリスクと思われるが、全例に切除術が施行されている。予後をみれば、切除術施行17例中1年以内死亡は高年群に2例、5年以上生存は中、高年群に各1例あり、摘出術施行5例中1年以内死亡は中年群に1例、5年以上生存は中年群に1例となっている。また姑息的治療は全例が中年群であり、うち2例は1年以内に死亡している。

若、高年群は主としてポリープ型であるため、積極的に切除術がなされているが、この両者間の予後の差はやはり年齢的なリスクが関与すると思われる。また中年群では浸潤型のうち、やむなく姑息手術あるいは放射線療法、化学療法におわるものがあり、予後不良とする一因になっていると思われる。

むすび

28歳、男性の若年者食道平滑筋肉腫の1例を経験したので報告した。あわせて本邦報告例30例を加えて、食道平滑筋肉腫の予後を規定すると思われる諸因子と年齢との関係について検討した。

文 献

- 1) 志田二郎：食道肉腫のレ線像について。東北医誌，40：203～204，1950。
- 2) 食道疾患研究会編：臨床・病理食道癌取扱い規約。金原出版，東京・京都，1976。
- 3) 亀岡信悟ほか：長期生存した食道肉腫の1例。外科診療，18：288～292，1976。
- 4) Thoreck, P., et al: Rhabdomyosarcoma of the esophagus. J. Thorac. Surg., 20：77～89，1950。
- 5) 米沢利英ほか：胸部食道平滑筋肉腫切除治験例。外科，13：252～253，1951。
- 6) 牛沢 巖ほか：食道平滑筋肉腫の1手術治験例。外科，18：217～218，1956。
- 7) 木村芳正：食道平滑筋肉腫と胃円柱上皮癌の併発した稀有な1例。癌，47：698～701，1956。
- 8) 斎藤達雄ほか：食道肉腫と胃癌とを併発した稀有

- な1例. 日消病会誌, 54: 47, 1957.
- 9) 楠本 剛ほか: 食道癌肉腫の1例. 岡山医学会誌, 70: 4699, 1958.
 - 10) 福田道隆ほか: 上腕神経叢圧迫症状をもってはじめた食道平滑筋肉腫の剖検例. 東北整災外紀, 6: 155-159, 1962.
 - 11) 森 平真ほか: 食道平滑筋肉腫について. 久留米医学会誌, 28: 286-292, 1963.
 - 12) 山川邦夫ほか: 縦隔腫瘍を思わせた肺癌および食道肉腫の2症例. 日内会誌, 52: 186, 1963.
 - 13) 近藤利満ほか: 食道平滑筋肉腫と胃癌の重複例. 青森中病医誌, 12: 309-314, 1964.
 - 14) 中山恒明ほか: 食道肉腫. 外科治療, 16: 261-267, 1967.
 - 15) 田中隆士ほか: 食道平滑筋肉腫の1例. 外科診療, 11: 1137-1141, 1969.
 - 16) 服部龍夫ほか: 食道平滑筋肉腫の1例. 癌の臨床, 13: 1061-1063, 1967.
 - 17) 遠藤光夫ほか: 食道平滑筋肉腫の1治験例. 胃と腸, 4: 1141-1145, 1968.
 - 18) 岡本 堯ほか: 食道平滑筋肉腫の1例. 外科, 31: 1434-1436, 1969.
 - 19) 飯塚紀文ほか: 食道平滑筋肉腫の切除5年生存例(その特異な経過について). 日消病会誌, 67: 270-275, 1970.
 - 20) 山口 晋ほか: 食道平滑筋腫瘍の手術経験. 外科診療, 14: 1377-1382, 1970.
 - 21) 山時好郎ほか: 食道平滑筋肉腫の1手術治験例. 日胸外会誌, 19: 106, 1971.
 - 22) 食道平滑筋肉腫1例および食道平滑筋肉腫2例の手術経験. 日消外会誌, 7: 327, 1974.
 - 23) 山内秀夫ほか: 若年者に発生した頸部食道平滑筋肉腫の1例. 外科診療, 14: 599-602, 1972.
 - 24) 小金丸道彦ほか: 放射線治療の著効を奏した巨大食道平滑筋肉腫の1剖検例. 臨床放射線, 17: 490-498, 1972.
 - 25) 松波 己ほか: 巨大な食道平滑筋肉腫の1例. 外科, 35: 686-689, 1973.
 - 26) 長田卓二ほか: 食道平滑筋肉腫の1例. 日外会誌, 74: 463, 1973.
 - 27) 辻 政彦ほか: 食道平滑筋肉腫の1治験例. 日消外会誌, 7: 326, 1974.
 - 28) 児玉治彦ほか: 食道平滑筋肉腫の1例. Gastroenterol. Endosc., 16: 625, 1974.
 - 29) 小堀鷗一郎ほか: 急速に発育し, 出血を伴った食道巨大平滑筋肉腫の1例. 日消外会誌, 7: 326, 1974.
 - 30) 斉藤寿一ほか: 食道平滑筋肉腫の1治験例. 癌の臨床, 22: 339-342, 1976.
 - 31) 藤田秀春ほか: 食道平滑筋肉腫の1治験例—並びに本邦集計26例の検討—. 外科治療, 38: 241-246, 1978.
 - 32) 戸倉康之ほか: 診断上, 興味をしめした巨大食道平滑筋肉腫の1治験例. 外科診療, 19: 1101-1106, 1977.
 - 33) 吉田 冲ほか: 食道平滑筋肉腫の手術経験. 日消外会誌, 11: 419, 1978.
 - 34) 中村浩一ほか: 食道平滑筋肉腫の1治験例. 癌の臨床, 24: 1234-1237, 1978.
 - 35) 山田真一ほか: 食道平滑筋肉腫の1例. 日消病会誌, 74: 244, 1978.
 - 36) Grade, J.T., et al: Leiomyosarcoma of the esophagus. J. Thorac. Cardiovasc. Surg., 75: 740-746, 1978.
 - 37) Rainer, W.G., et al: Leiomyosarcoma of the esophagus; review of the literature and report of 3 cases. Surgery, 58: 343-350, 1965.
 - 38) Kaufman, K.: Hundbuch der speziellen pathologischen Anatomie und Histologie. Julius Springer, Berlin, 1926.
 - 39) Ewing, J.: Neoplastic disease. W.S. Saunders Comp., Philadelphia, 1940.